



制服の世界
THE UNIVERSE OF UNIFORMS
世界の制服

インドネシアの法廷の表と裏

高野 さやか 日本学術振興会特別研究員

法廷という場で制服は、国家権力を誇示し、権威を補強している。法服を着ている人たちにとって、行動の自由はどこまで許されているのだろうか。

どんな色にも染まらない

裁判、というところのようなイメージがあるだろうか。おそらくニュースで流れるような法廷の静止画を思い浮かべる人が多いだろう。柵の向こうには真ん中に椅子があり、左右に相對するように弁護士と検事が座っている。そして正面中央の一番奥の少し高いところに、黒い服を身にまとい、にこりともしないで座っているのが裁判官である。この服は法服とよばれる。なぜ黒いかは「どんな色にも染まらない」公平の象徴」などの説があるが、これも規則で定められた一種の制服である。

この裁判官のイメージは、筆者が調査しているインドネシアでもあまり変わらない。しかし赤道直下にあるインドネシアは、やはり暑い。エアコンがあるのは所長室や裁判官の居室などのごく一部にすぎない。壁や天井からぬるい風を送っている扇風機も、しょっちゅう起きる停電のあいだは止まってしまふ。法廷は天井が高く窓が多く、風とおしくできてくるのだが、それでも行き交う人びとの熱気がこもる。

にもかかわらず、裁判官と検察官は丈の長いガウンで体を覆っている。

見え隠れする裁判官の個性と日常

法廷での裁判官は表情を崩すこともなく、書記官とやりとりしながら裁判を進めていく。検察官や弁護士からはさまざまな書類を受け取る。真実を証言するとの宣誓をうながしてから、証言に耳を傾ける。また、ゆっくりと判決文を読み上げる。

では、その舞台裏はどうなっているのだろうか？ 当然、裁判官は出勤時から黒いガウンなのではない。男性はインドネシアの公務員一般におなじみのカーキ色の上下の服、女性はもう少し幅があるが、上下揃いのスーツを着てやってくる。裁判所には各裁判官の居室があるが、そこでもその服装は変わらない。裁判が始まるまでは、同室の裁判官どうしで談笑したり、それぞれの机で食事をとったり、新聞や資料に目をおしたりと、意外にゆったりした時間が流れている。

朝一〇時ごろになると書記官がやってきて部屋のドアをノックし、「裁判



検察官は黒いガウンを着ている



居室での様子。女性の裁判官も多い



スーツにネクタイ姿の弁護士



事務員の人たち。ヴェールや帽子で髪をおおっているのはイスラム教徒の女性

地方裁判所では裁判

官の法服は肩から胸元にかけて赤く、首には白いチーフをつける。黒一色なのは検察官、長袖シャツにネクタイを締めているのは弁護士だ。何しろここは裁きの場なのである。当初は、学生気分で半袖にジーンズ姿だった筆者もすぐに、調査者として目立ちすぎないよう襟のついた



裁判の様子。中央に証人が座っている

長袖、爪先の見えない靴という正式な場に出るときの服装を買い足した。です」と声をかける。すると彼らはおもむろにガウンを服の上からはおり、部屋を出る。戻ってくるとすぐにガウンを脱ぎ、再びそれぞれに割り当てられたロッカーにしまふ。そしてときどきは自分でクリーニングに出したりもする。

法服は裁判官にとって、法廷という舞台上で堂々と役を演じるにあたって必要な衣装であるようだ。しかし、だとしたら、おそろいの法服を身に付けて難しい顔をした裁判官は、同じ役割を割り当てられた個性のない存在なのだろうか？ いや、そうでもないだろう。たとえば裁判中に足を組んでいる人に姿勢を直すよう注意をうながす裁判官もいれば、審理のあいだに携帯電話に出る人もいる。開始時間だつてずいぶんルーズだ。法廷という舞台を整えようとするなかでも、さまざまなかたちで人びとの個性や日常が見え隠れする。法廷の表と裏とは、そう簡単に区別できるものでもないようだ。